

平成22年6月15日現在

研究種目：基盤研究 (B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19320141
研究課題名 (和文) 戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究—社会における学問実践の形
研究課題名 (英文) A Comparative Study of the History of Folklore Studies since the 1950s in Germany and Japan: Academic Interests and Society
研究代表者 森 明子 (MORI AKIKO) 国立民族学博物館・研究戦略センター・教授 研究者番号：00202359

研究成果の概要 (和文)：本研究は、戦後ドイツの民俗学研究が、政治や経済、社会の動向と深く関わって展開してきたことに注目し、その多角的な展開の過程を明らかにすることを目的とした。そこで、ドイツの10の大学研究所を選び、その研究と教育の軌跡を明らかにした。次に、日本の民俗学研究との比較において、三つの局面がその視座を構成することを明らかにした。すなわち、ファシズム政権下のアカデミズム化、高度経済成長期の方法論の見直し、東西ドイツ再統一後のヨーロッパ化という関心である。

研究成果の概要 (英文)：The folklore study of postwar Germany has been developing deeply concerned with the trend of political, economical and social conditions of Germany. Noting this fact, the aim of this research is set to clarify the history of the multifactorial development of the study, and to compare this history with that of Japan. We selected ten university institutes, to trace their own history, research and education concretely. It became clear that the following three phases are critical from the comparative perspective: academization of the folklore study in the fascistic society, rethinking folklore methodology in the high growth period, and Europeanization as a research subject after the reunification.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	6,800,000	2,040,000	8,840,000

研究分野：中部ヨーロッパ文化人類学

科研費の分科：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：(1)文化人類学研究、(2)民俗学研究、(3)文化研究、(4)世論、(5)ドイツ研究  
(6)日本研究

## 1. 研究開始当初の背景

民俗学は、18世紀のドイツ・ロマン主義にその源をたどり、19世紀から20世紀にかけて、国民国家の形成と歩調をあわせて形成された。ドイツでは「純粋な民俗・民族の遺産を保存するという民俗学のイデオロギーが、ナチスの人種主義的プログラムの燃料供給源 (Bendix 1998) としてナチスに迎えられ、それによって大学講座を得た経緯がある。したがって、戦後のドイツ民俗学は、脱ナショナリズム化の努力からはじまった。その後も、「奇跡の経済」といわれた50年代、「反体制運動」の60年代、「新しい社会運動」の70、80年代、東西ドイツの統一とEU統合の90年代と展開する時代の中で、民俗学研究は、社会の要請に敏感に反応しながらその進むべき方向を探ってきた。

ドイツの民俗学は、1960年代末から70年代にかけて転機を迎えた。研究目的・研究対象、方法論をめぐる激しい議論は、大学講座の名称変更に至り発展した。この改革運動や、民俗学とファシズムの結合に関するドイツ国内の議論 (Beck and Scholze-Irrlitz 2001) が英語圏に知られるのは、1980年代半ば以降で (Dow and Lixfeld 1986)、1998年にアメリカとドイツの民俗学者による国際シンポジウムが開催された (Journal of Folklore Research 1999)。だが、日本の研究者がこの問題に十分な関心をはらってきたとはいえない。いくつかの紹介はされたが、部分的であるか、詳細であっても今日的な問題としてとらえる視線が乏しかった。(坂井1982、河野2005)。

## 2. 研究の目的

本研究は、戦後のドイツの大学における民俗学研究が、社会運動や文化運動、政治問題などの社会の動向と深く関わって展開してきたことに注目し、現代における人文社会科学の再編成という視点から、その多角的な展開の過程を明らかにすることを目的とした。さらに、この過程を日本の民俗学研究の状況と比較検討し、社会における学問実践の形を探った。

ドイツの民俗学は、社会から何を期待され、また、社会に対して何を貢献してきたのか。このテーマを、まず、日本の民俗学と比較した。次にこのテーマを、民俗学と隣接する諸学問との、間-領域的な問題としてとらえて検討し、さらに、その問題関心を、ドイツの民俗学研究者と共有して、意見交換した。学問のナショナルな性格と社会における意味を、国際的に相対化した視点からとらえ、学問と社会との、包摂しながら、かつ批判的である関係について検討した。

## 3. 研究の方法

ドイツ民俗学は、国家や社会からの要請に対し、隣接分野を柔軟に取り込みながら、それに応じて展開してきた。学問とその政治的、社会的な文脈の関わりに焦点をあて、その局面を解明するために、民俗学の専門知識をもってドイツ民俗学の実践をとらえる視線と、民俗学の外からこれを相対的にとらえる視線を確保した。すなわち、ボトムアップの社会の要請を明らかにするために、文化人類学および民俗学の立ち位置から、市民や住民の立場からなされる社会運動、文化運動に注目する一方で、国家や大きなレベルでの社会の動向をとらえるために、メディア論からアプローチした。また、民俗学の認識論を検討するにあたっては、ドイツと日本の比較という視座を加えることで、相対化してとらえるパースペクティブを確保した。この役割分担は以下の通りである。

- ・森明子 (文化人類学) : 新しい社会運動と民俗学、総括
- ・岩本通弥 (民俗学) : 民俗学の認識論
- ・佐藤卓己 (メディア論) : 総力戦期以降の世論調査
- ・重信幸彦 (民俗学) : 民俗学と地方文化運動
- ・法橋量 (民俗学) : 民俗学理論

具体的には、戦後ドイツの民俗学研究が、地域の文脈と、ナショナルな文脈、インターナショナルな文脈のなかで、どのように展開してきたか、個別の研究所の軌跡を、跡付けた。とりあげた大学研究所は、①テュービンゲン大学、②ミュンヘン大学、③ハンブルグ大学、④フライブルグ大学、⑤フランクフルト大学、⑥マールブルグ大学、⑦ゲッティンゲン大学、⑧キール大学、⑨ベルリン・フンボルト大学、⑩ウィーン大学で、共通の調査項目として以下の5点を設定した。

1. 当該研究所の沿革
2. 研究の重点の歴史的展開
3. 教育の重点と学生プロジェクト
4. 研究プロジェクトとその成果
5. 附属図書館とアーカイブの現状と沿革

## 4. 研究成果

戦後ドイツの民俗学研究の軌跡をたどり、それを日本の研究状況と比較して、ドイツの研究者と意見交換を重ねていった結果、現代の民俗学研究の状況を理解するうえで、重要な時期として、1930年代から40年代にかけて、1960年代から70年代にかけて、さらに1990年代以降という三つの時期が浮かび上がってきた。

それぞれは、「社会のファシズム化と、民俗学のアカデミズム化」、「高度経済成長期の社会運動の高まりと、民俗学の研究対象・方

法論の見直し」、「東西ドイツ統一、EUの東方拡大、ネオ・リベラリズムと、民俗学のヨーロッパ民族学・化」として特徴づけることができる。

民俗学はドイツと日本の双方で、ほぼこの三つの時期に自身を定義／再定義し、社会およびアカデミック・コミュニティのなかに配置／再配置していった。民俗学の改革をどのように構想し、展開していったか、研究テーマをいかに選定し、それがどのように変化していったか、ということは、各研究所がおかれた条件によって異なるが、政治的、経済的、社会的に設定される三つの時期が、ドイツの各研究所に共通して、また日本においても、民俗学の展開に重要な意味をもったことは共通している。

ドイツの民俗学は、19世紀末に地方に起こった、自然環境や文化の保護を目的とする郷土運動のもとで育まれた。しかし、アカデミズム化する過程で、地方のアマチュア的実践と袂を分かっていく。アカデミックな民俗学は、ローカルな知の蓄積を、ナショナルな知として体系づけようとするいとなみであり、そこに政治的な野心が介入する余地があった。ナショナルな政治や経済の要請に応えることは、ファシズムとの協力関係を導き、民俗学が文献学へと閉塞していく道筋を用意した。1960年代、ゆきすぎた近代化を批判する社会運動が広まるのと歩をともにして、文献学として知の体系をつくっていた民俗学は、社会科学を射程に入れた経験学として脱皮をはかり、科学としての方法論を模索した。1970年代初頭の民俗学の改革運動の背後で、大学改革が同時に進行していた。1990年代、学が研究の対象とする領域を国家からヨーロッパに拡大すると時を同じくして、「郷土」が「文化資源」と「環境」という新しい概念を携えて、再び民俗学の主要なテーマとして前景化してきた。このテーマが配置される文脈は、ナショナルを越えたインターナショナルであり、同時に、遠近法のなかに配置しなおされた地方である。

民俗学は、問題を配置する文脈を変えながら、繰り返し地方の実践に戻っていく。ローカルな知は、人間文化の重要な源であり、現代世界においてその意味はますます重要性を増している。現代世界の民俗学は、このローカルの知を、ナショナルな文脈、インターナショナルな文脈、再びローカルな文脈へと配置／再配置をおこなっているのであり、ローカルな知の動態につねにゆさぶられながら、社会をゆさぶることを任務としている。このような社会における実践に光をあてて、民俗学を隣接分野との関係のうえに再定位していくことが重要かつ必要であるという見通しを得た。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 34 件)

- ① 法橋量、現代ドイツ民俗学のプルーフリズム—超越する文化学への展開、日本民俗学、2010年8月刊行予定
- ② 森明子、ドイツの民俗学と文化人類学、国立民族学博物館研究報告、査読有、33巻3号、2009、397-420頁
- ③ 森明子、外国人労働者の定住化—ベルリンにおける世代交代の事例から、国立民族学博物館調査報告、査読有、No. 83、2009、15-28頁
- ④ 森明子、マイノリティの歴史学—オリエンタリズム、ジェンダー、ポスト・コロニアリズム、飯田隆他編『岩波講座哲学 11 歴史/物語の哲学』岩波書店、査読無、11、2009、161-184頁
- ⑤ 岩本通弥、「生活」から「民俗」へ—日本における民衆運動と民俗学、日本学、査読無、29、2009、29-63頁
- ⑥ 岩本通弥、海外の現代民俗学—東アジア編・特集に当たって、日本民俗学、査読有、259、2009、1-4頁
- ⑦ 岩本通弥、都市民俗学的方法的考察(再録)、倉石忠彦ほか編『都市民俗研究の方法』岩田書院、査読無、2009、229-327頁
- ⑧ 佐藤卓己、弾圧された右翼ジャーナリズム—昭和言論史の再審へ、中央公論、査読無、1月号、2009、57-65頁
- ⑨ 重信幸彦、「野」の学のかたち 小倉郷土会の実践から、小池淳一編『民俗学的想像力(歴博フォーラム)』せりか書房、査読無、2009、134-158頁
- ⑩ 森明子、生活のなかで環境を考える、洗濯の科学、査読無、53(1)、2008、32-35頁
- ⑪ 佐藤卓己、インターネット時代のテレビ的教養：“ローカルな知”の可能性?、日本の社会教育、査読有、第52集、2008、157-169頁
- ⑫ 岩本通弥、以“民俗”為研究对象為民俗学嗎—為何公民俗学疏離了“近代”、文

- 化遺産、査読有、2008-2、2008、78-86 頁
- ⑬ 岩本通弥、可視化される習俗—民力涵養運動期における『国民儀礼』の創出、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、141号、2008、265-322 頁
- ⑭ 岩本通弥、戦後日本民俗学とドイツの影響—埋め込まれた連続性、『戦後民族学／民俗学の理論的展開—ドイツと日本を視野に（国際シンポジウム報告書）』成城大学文学研究科・成城大学民俗学研究所、査読無、2008、46-67 頁
- ⑮ 岩本通弥、柳田國男と「一国民俗学」の創出（ハングル）、東アジアの近代化と民俗学の創出、査読無、2008、29-94 頁
- ⑯ 重信幸彦、〈遊撃〉の街へ—「新自由主義」の時代を走るタクシー、国文学解釈と鑑賞、査読無、73 卷 8 号、2008、134-158 頁
- ⑰ 重信幸彦、ストーリーテリング、関口安義編『アプローチ児童文学』翰林書房、査読無、2008、93-100 頁
- ⑱ 佐藤卓己、キャスル事件をめぐる〈怪情報〉ネットワーク、猪木武徳（編）『戦間期日本の社会集団とネットワーク—デモクラシーと中間団体』NTT出版、査読無、2007、111-135 頁
- ⑲ 佐藤卓己、学校放送から「テレビ的教養」へ、放送メディア研究、査読無、第 4 号、2007、59-85 頁
- ⑳ 佐藤卓己、セロンにまよわずヨロンにもかかわらず—第 10 回世論の中心で、輿論を叫べ！、考える人、査読無、秋号、2007、159-167 頁
- ㉑ 佐藤卓己、セロンにまよわずヨロンにもかかわらず—第 9 回世論天皇制と昭和の終焉、考える人、査読無、夏号、2007、137-145 頁
- ㉒ 岩本通弥、現代日本の文化政策とその政治資源化—『ふるさと資源化』とフォークロリズム、山下晋司編『資源化する文化—資源人類学 02』弘文堂、査読無、2007、239-272 頁
- ㉓ 岩本通弥、「文化立国」論の憂鬱—民俗学の視点から（再録）、鹿谷勲・長谷川嘉和・樋口昭著『民俗文化財—保護行政の現場から』岩田書院、2007、20-29 頁
- ㉔ 岩本通弥、「スウェーデンの冥福観と老人介護」へのコメント—民俗学の立場から、比較日本文化研究、査読無、11、2007、28-37 頁
- ㉕ Shigenobu Yukihiro, “Through the Eyes of a Good Deed Investigator”, Akira Furukawa ed., *Frontiers of Social Research: Japan and Beyond*, Trans Pacific Press, 査読無、2007、158-182 頁
- ㉖ 重信幸彦、「採集」する身体（メディア）へ、松本清張研究、査読無、8 号、2007、92-117 頁
- ㉗ 重信幸彦、郷土研究と実践のリテラシー、『第 63 回歴博フォーラム民俗学の行方』国立歴史民俗博物館、査読無、2007、12-13 頁
- [学会発表] (計 26 件)
- ① 重信幸彦、「声」という素材：民俗学における「人の語り」との向き合いかた、北海道大学大学院文学研究科大学院教育改革支援プログラム主催公開シンポジウム「人の語りから—人を知る」、2010 年 2 月 29 日、北海道大学学術交流会館（北海道）
- ② 佐藤卓己、通信教育と「孤独な学習」—『ラーニング・アロン』を考える—、日本通信教育学会 第 1 回研究交流集会、2010 年 2 月 13 日、キャンパスプラザ京都（京都府）
- ③ 森明子、「社会的なるもの」をめぐる議論、京都人類学研究会 2009 年 12 月季節例会「社会的なるものの持続性—「環境」から考える」—、2009 年 12 月 26 日、京都大学稲盛財団記念館（京都府）
- ④ 佐藤卓己、メディアと世論調査—ファシスト的公共性の視点から—、社会文化学会第 12 回全国大会、2009 年 12 月 13 日、大阪大学箕面キャンパス（大阪府）
- ⑤ 重信幸彦、「再話」論の射程、日本口承文芸学会 第 58 回研究例会、2009 年 11 月 7 日、國學院大学（東京都）

- ⑥ 森明子、博覧の世紀をめぐる、心が生きる教育のための国際拠点グローバルCOEワークショップ「メディア文化政策における《博覧の世紀》との可能性」、2009年10月23日、京都大学烏丸キャンパス（京都府）
- ⑦ 岩本通弥、「生活」から「民俗」へ—日本における民衆運動と民俗学、第40回文化学術院国際学術大会「民俗学と社会・民衆運動—フォークロアの政治学」、2009年8月29日、東国大学校日本研究所（韓国）
- ⑧ 重信幸彦、運動の時代と「聞き書き」という実践：1950年代日本の民話運動とサークル運動から、韓国ソウル・東国大学校 第40回文化学術院日本学研究所国際学術大会「フォークロアと社会・民衆運動」、2009年8月29日、ソウル東国大学校キャンパス（韓国）
- ⑨ 岩本通弥、民間信仰の文化遺産化のアポリア—日本の事例を中心に、第7回中国民間文化青年論壇「民間信仰と文化遺産」、2009年8月7日、北京師範大学珠海分校（中国）
- ⑩ 森明子、ローカルな知としての民俗学と、中央の学としての民俗学、愛知大学国際コミュニケーション学会・三河民俗談話会 ミニ・シンポジウム「民俗学における民間とアカデミズム」、2009年7月4日、愛知大学（愛知県）
- ⑪ 岩本通弥、「生活」か「民俗」か—日本における市民サークルと民俗学のアカデミズム化、愛知大学国際コミュニケーション学会・三河民俗談話会ミニ・シンポジウム「民俗学における民間とアカデミズム」、2009年7月4日、愛知大学（愛知県）
- ⑫ 岩本通弥、現代日常生活の誕生—昭和37年度厚生白書を中心に、第69回歴博フォーラム「高度経済成長と生活変化」、2009年6月20日、一橋記念講堂（東京都）
- ⑬ 佐藤卓己、＜昭和＞の記憶と世論／輿論、日本マス・コミュニケーション学会春季大会、2009年6月6日、立命館大学衣笠キャンパス（京都府）
- ⑭ 森明子、共同性の構築とソーシャル概念、日本文化人類学会第43回研究大会、2009年5月30日、大阪国際交流センター（大阪府）
- ⑮ 佐藤卓己、日本におけるテレビ的教養の系譜、国際ワークショップ「東アジアにおける視聴覚メディアの相互連関」、2008年12月28日、中国・上海社会科学院（中国・上海）
- ⑯ 岩本通弥、「グローバル文化のローカル化、ローカル民俗のグローバル化」に関するコメント、韓国民俗学会国際学術大会、2008年12月12日、国立民俗博物館（韓国・ソウル）
- ⑰ 法橋量、現代ドイツ民俗学と〈語り〉研究の現状について—A. レーマンの研究を通して、比較民俗学研究会、2008年11月30日、神奈川大学（神奈川県）
- ⑱ 岩本通弥、民俗文化と地域の活性化—その問題点と可能性、日本昔話学会 2008年度大会、2008年10月12日、大町文化会館（長野県・大町市）
- ⑲ 岩本通弥、民俗学は「民俗」学ではない—現代民俗学の輪郭、現代民俗学会、2008年9月20日、お茶の水女子大学（東京都）
- ⑳ 法橋量、〈民俗〉の学から〈日常〉の学へ—ドイツ民俗学の挑戦、第836回日本民俗学会関東談話会、2008年9月14日、成城大学（東京都）
- ㉑ 森明子、生活に埋め込まれたシステム—ドイツの事例から、日本家政学会第60回記念大会シンポジウム『生活と環境—日本における暮らしのエコ再考』、2008年6月1日、日本女子大学（東京都）
- ㉒ 佐藤卓己、ファシスト的公共性の射程：《ナチ宣伝》か《ナチ広報》か、日本広告学会全国大会、2007年12月15日、メルパルクKYOTO（京都府）
- ㉓ 森明子、「共同体の物語り」とフィクション、京都大学人文科学研究所共同研究会「虚構と擬制」研究班、2007年11月19日、京都大学人文科学研究所（京都府）
- ㉔ 佐藤卓己、情報宣伝から世論調査へ—戦後「世論」の成立史—、日本世論調査協会大会、2007年11月9日、中央大学記念館（東京都）
- ㉕ 佐藤卓己、教育将校・鈴木庫三の軌跡—日本大学助手から情報局情報官へ、日本

大学教育学会秋季学術研究発表会、  
2007年10月27日、日大文理学部（東  
京都）

- ⑫ 森明子、ドイツの民俗学と文化人類学、  
文化人類学会近畿地区研究懇談会、  
2007年7月7日、千里ライフサイエン  
スセンター（大阪府）

〔図書〕（計17件）

- ① 佐藤卓己、思文閣出版、『知の伝達メ  
ディアの歴史研究』、2010、306頁
- ② 重信幸彦・原英昭共編、北九州市立大  
学重信研究室刊、『新聞資料にみる小  
倉祇園』、2010、300頁
- ③ 岩本通弥・篠原聡子・金子淳・前田裕  
子・宮内貴久、国立歴史民俗博物館、  
『基幹研究「高度経済成長と生活変  
化」ワークショップ3「団地暮らしの  
誕生と生活革命」報告・討論記録集』、  
2009、197頁
- ④ 佐藤卓己、岩波書店、『ヒューマニテ  
ィーズ歴史学』、2009、141頁
- ⑤ 佐藤卓己、ナカニシヤ出版、『心が生  
きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ  
心理学・教育学』、2009、210頁
- ⑥ 佐藤卓己、ミネルヴァ書房、『近代日  
本メディア人物誌—創業者・経営者  
編』、2009、277頁
- ⑦ 佐藤卓己、毎日新聞社、『1968年に日  
本と世界で起こったこと』、2009、208  
頁
- ⑧ 佐藤卓己、世界思想社、『社会学ベー  
シックス第6巻メディア・情報・消費  
社会』、2009、260頁
- ⑨ 小池淳一編（重信幸彦他共著13名）、  
せりか書房、『民俗学的想像力』、2009、  
283頁
- ⑩ 李相賢・岩本通弥・周永河・張隆志・  
南根祐、民俗苑、『東アジアの近代化  
と民俗学の創出』、2008、365頁
- ⑪ 佐藤卓己、NTT出版、『テレビ的教養—  
一億総博知化の系譜』、2008、318頁
- ⑫ 佐藤卓己・井上義和編、新曜社、『ラ  
ーニング・アロン—通信教育のメディ  
ア学』、2008、361頁

- ⑬ 佐藤卓己、新潮社、『輿論と世論—日本  
的民意の系譜学』、2008、350頁

- ⑭ 沢山美果子・岩上真珠・立山徳子・赤川  
学・岩本通弥、青弓社、『「家族」はどこ  
へいく』、2007、230頁

- ⑮ 柏倉康夫・佐藤卓己・小室広佐子、日本  
放送出版協会、『日本のマスメディア』、  
2007、172頁

- ⑯ 西平喜重・岡田直之・佐藤卓己・宮武実  
知子、新曜社、『輿論研究と世論調査』、  
2007、240頁

- ⑰ 佐藤卓己・孫安石編、筑摩書房、『東ア  
ジアの終戦記念日—敗北と勝利のあい  
だ』、2007、253頁

〔その他〕

○ホームページ

国立民族学博物館ホームページ

[http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/  
19320141.html](http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19320141.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 明子 (MORI AKIKO)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教  
授

研究者番号：00202359

### (2) 研究分担者

佐藤卓己 (SATO TAKUMI)

京都大学大学院・教育学研究科・准教授

研究者番号：80211944

### (3) 連携研究者

岩本 通弥 (IWAMOTO MICHIIYA)

東京大学大学院・総合文化研究科・教授

研究者番号：60192506

重信 幸彦 (SHIGENOBU YUKIHIKO)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：70254612

### (4) 研究協力者

法橋 量 (HOKKYO HAKARU)

慶應義塾大学・非常勤講師